

物故会員

野口 米次郎

のぐち よねじろう 詩人 1875 - 1947 掲載詩は「三田文学」大正十五年四月号に初出。

われ山上に立つ

かくてわれ山上に立ち、
生命と沈黙の勇者……勝ち誇り、
空に眼(まなこ)をむけ、突立ちあがり、
没せんとする太陽(ひ)を見て微笑み、麗しく悲しき告別を歌ふ。

夕(ゆふべ)は神秘にてわれをとり巻き、
その香気は伝統の如くかんばし、
ああ、われにしのみ寄る諸々の思想は、
譬ふれば、外国(とつくに)の微風(かぜ)の如く或は蛇の如し。

人若(も)しわが山上の姿を見なば、
静に飛ばんとする詩神にて、
われに黄金の快調あり気高き風貌ありといふなるべし。
げに、われは都会の剣(つるぎ)を嫌ひ、
その狂暴なる威嚇をののしつて立つものなり。

太陽(ひ)は重も重もしくはるかに沈み、
甘き誘惑と暗明の手にわれを残しゆく。
夕はながながとその影を払つて西方へと過ぎ、
西方へ過ぎゆく夕と共に、樹木の長き影は消ゆる……
如何に無言に沈黙の歌はわが魂にしのみびだまんとするよ。
われは、蟋蟀の間、
星が歌に響かする幽玄のなかに依然として立ち、
如何に柔にその身が夕に鎔けゆくかを見んとするなり。

月は徐々として上る……わが影は
夢の如き夢の逍遙を地上に描く。
空に微笑み無言の歓迎を述べる一箇の人間あり、
そはわれにあらざるわれなりと知り給へ。